



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	他者と出会う : 支配の欲求から出会いの欲求への転回
Author(s)	山田, 義裕
Citation	大交流時代における観光創造, 70, 249-266
Issue Date	2008-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34597
Type	departmental bulletin paper
File Information	249-266.pdf



他者と出会う

—— 支配の欲求から出会いの欲求への転回 ——

山 田 義 裕

1. はじめに

現代という情報化と消費化が進んだ社会は、人への信頼よりも制度や管理システムに頼ることで問題を解決しようとしがちである。確かに、制度を整備し管理システムを充実させることで、生活の利便性を高め、地域のセキュリティの向上をはかることもできよう。ただ、制度や管理システムへの過度な依存は、人への信頼に基づく問題解決の仕組みをやせ細らせる。信頼の仕組みが弱体化すると、人への希望よりも制度への期待がいつそう高まり、社会は終わりのなき管理システム強化のサイクルへと入っていく。

現代社会の多くの問題は社会制度の不備よりも人間関係の不安定さに起因している。今必要なのは制度の充実ではなく、人への信頼の仕組みの再構築である。

本稿では、「他者との出会い」のもつ潜在力を、人への信頼を基礎とする社会の構想にいかに関活用できるかを、紛争地支援やまちづくりに関するいくつかの事例に基づき考察する。

2. 「出会う」ことと「支配する」こと —— 他者関係についての二つの欲求の相

フロム（1951：25）によると、人間の自己保存のための欲求の一つに「外

界と関係を結ぼうとする欲求、孤独を避けようとする欲求」があり、私たちが他者を求めるのはこの精神的孤独への恐怖からなのだろう¹。他者関係への欲求は、確かに精神的孤独の回避がその根源にあるのかもしれないが、この欲求の具現には実は二つの異質の相があることを真木（2003）は論じている。

真木は他者と関係する時に抱く基本の欲求には二つの相、具体的には「他者を支配する欲求」と「他者との出会いへの欲求」があると主張する。他者を支配する欲求にとっては、他者は「手段もしくは障害であり、他者が固有の意思をもつ主体として存在することは、状況のやむをえぬ真実として承認されるにすぎない」²。一方、他者との出会いへの欲求にとっては、「他者の自由とその主体性こそが欲求される」のである。別なことばで言い換えると「支配の欲求は同化的であり、出会いの欲求は異化的である」のだ。

「支配の欲求」あるいはそれと表裏をなす「迎合／依存の欲求」に方向づけられた他者関係は植民地や占領地における先住民と宗主国の人間との関係に典型的に見出せる。現地の人が土着のことばや慣習を捨て、宗主国の言語や文化へと同化していった（あるいは同化を余儀なくされた）事例は、植民地主義や帝国主義の歴史を振り返れば数多く見つかるはずだ³。

「出会いの欲求」に基礎をおく他者関係の典型はどこに見出せるであろうか。真木は「出会いの欲求」は「異化的」だという。つまり、異質な他者との出会いにより、自明だと思い込んでいた世界や自分自身の姿を「あたりまえではないもの」として認識しなおすことを欲する気持ちである。神崎

1 フロムの考える「孤独の恐怖 (the fear of isolation)」の理由は次の二つである。

- a. 乳幼児期のイノセントな体験：これにより人は他者の世話がなければ生きられないという認識を持つに至る
- b. 自己認識の能力：自分が他者や外界と別個の存在であることを認識する精神機能であり、これにより世界の中のちっぽけな存在であるという自意識を持つに至る

2 迎合や契約も支配の欲求の妥協的バリエーションである。

3 はるか昔の遠い国の話ではない。例えば、沖縄では方言札を使った標準語教育が少なくとも 1972 年の本土復帰後もしばらく行われていたのである。

(2005：16) は、江戸時代の『旅行用心集』の一節を引きながら、観光の旅が「異民俗・異文化との出会いの中で、新しい自己を見出す」ものであると述べている。近代以降の観光が「自己を他者へと異化する」場となっているかどうかについては議論の余地があろう。しかし、神崎のいうように観光の旅というのは元来「出会い」を通しての自己発見の場であるならば、ここには「出会いの欲求」に基づく他者関係構築の潜在的な可能性が秘められていると考えるのは的外れなことではないだろう。

次節では、「支配の欲求」と「出会いの欲求」という対概念が、現代社会が抱える問題を他者関係に基づいて分析する際に有益なツールとなることを論ずる。

3. 現代社会における「支配」と「出会い」——社会問題解決の二つのアプローチ

前節で、人と人との関係の構築は二つの異なる相の欲求、すなわち「支配の欲求」と「出会いの欲求」に基づくという考えを紹介した。この真木の他者関係についての洞察を、現代の社会問題を解決する具体的方策をめぐる議論へと敷衍していくのがこの節のねらいである。

現代社会を近代以前と区別する大きな特色は情報化および消費化である⁴。社会の情報化と消費化のおかげで現代人は確かに「豊か」になったかもしれない。しかし、奔流となって全世界に流れ出した情報化と消費化の荒波にもまれ、もがき苦しんでいる人もおびただしい数にのぼる。現代の情報化・消費化社会は人の生存に関わる大問題を多く抱えている。例えば国際的には、大規模開発による環境・資源の限界問題、市場経済のグローバル化により新たな局面を迎えている貧困問題や食糧問題、冷戦終結後に世界各地で噴出している民族対立や地域紛争の問題等々。また、国内に目を転じて、教育の制度と実践についての問題、医療をはじめとする社会保障の問題などがメディアを賑わせている。

4 見田（1996）を参照のこと。

私たちの社会ではこれらの問題への対処法として、情報化・消費化を徹底させながら社会制度の整備と管理システムの充実を目指すというアプローチがとられることが多い。例えば、教育や医療における都会と地方の地域格差については、情報インフラを整備し情報機器を充実させることで、「高度情報化」という名の情報システムのグレードアップが試みられる。また、京都議定書は地球温暖化対策として先進各国に温室効果ガスの削減目標を定めているが、削減計画を有効に機能させていくメカニズムとして「排出権取引」(Emissions Trading)を認め、それにより温暖化ガス排出量の取引という新しのビジネスが誕生している。これもまた、環境を「資源」とみなし、それをグローバルな市場経済システムにのせることで、問題の解決をはかろうというアプローチだ。

制度の整備や管理システムの充実により問題の解決をはかる人は、人と人との接触や直接関与を避け、制度やシステムに人々の行動をコントロールさせることを第一に考える。制度や管理システムを構想する側を動かしているのは「支配の欲求」であり、それを利用する側にあるのは、それとコインの裏表の関係にある「迎合／依存の欲求」である。

現代社会の問題解決は、このように「支配・依存の欲求」に導かれた関係構築、すなわち制度の整備と管理システムの強化の側に傾きがちである。このことをいち早く批判したのはオーストリアの思想家、イヴァン・イリイチであろう。

イリイチは『脱学校の社会』における教育制度批判を端緒に、医療や環境開発などの領域で、現代社会に生きる私たちの制度依存に対して痛烈な批判を行った⁵。例えば、開発・経済成長と教育について論じている「エコ教育とコモンズ」において、「制度がその能力を発揮すればするほど挫折にみちびかれる」のであって、「教育こそが、意味ある学習が行われうる条件に対するもっとも直接的な脅威であり、経済成長こそが、コモンズや慣習に対するもっと

5 イリイチは1980年代に入り、それまで行っていた制度批判の不備を認識し、現代社会のより根源的問題を批判すべく「稀少性の歴史」の研究へと向かう。詳しくはイリイチ(1991)を参照のこと。

も直接的な挑戦」であるとイリイチは主張している⁶。制度への依存により失われるものは何かというと「その土地の土地ことばや土地に根ざしたことばの意味」であり「生活に根づいた自立した生きかたを送るための環境」である⁷。これに反対する試み、すなわち「そこでもって各人が自立した生活を大切にできるような、自己を制限する共同体のうちに生活する権利をふたたび手にする」試みを、イリイチは「コモンズのとりもどし」と呼ぶ⁸。

イリイチのいう「コモンズ」とは、そこで生きる人が自立した生活をおくる場であり、また土地のことばで土地の文化を学ぶ場である。コモンズという概念を理解するには、環境を「資源」とみなす考え方と比較対照するのが分かりやすい⁹。例えば、「通り」という環境を例にとってみよう。かつて通りは、道端で野菜を売る場であり、村人が集会を開いたり、子どもたちがボール遊びをする場であった。通りは、土地に生きる人にそれぞれが自立して生きる環境を提供しているという意味で、まさにコモンズであった。現在の通りは、もはや人々の生活の場ではなく、自動車やバスなどの交通機関のための通路となっている。イリイチはこれを指して、通りが「コモンズ」から交通システムのための「資源」に変質したのだという。

コモンズをとりもどすための第一歩、それは制度依存の隠れた実態を自覚し、そこから脱却すべく、制度や管理システムではなく人に希望を託す問題解決を復活させることであろう。イリイチは「希望」と「期待」という似通った二つの概念の決定的違いを次のように洞察した上で、私たちは制度への「期待」ではなく、人や自然への「希望」をこそ社会を構想する基盤に置かなくてはいけないと述べている。

積極的な意味において、希望とは自然の善を信賴することであるのに対して、私がここで用いる期待とは、人間によって計画され統制される結

6 イリイチ（1999：77）を参照。

7 イリイチ（1999：86-87）を参照。

8 イリイチ（1999：90）を参照。

9 イリイチ（1999：46-48）を参照。

果に頼ることを意味する。希望とは、われわれに贈り物をしてくれる相手に望みをかけることである。期待とは、自分の権利として要求することのできるものをつくり出す予測可能な過程からくる満足を待ち望むことである。プロメテウスのエートスは、今日希望を侵害している。人類が生きながらえるかどうかは、希望を社会的な力として再発見するかどうかにかかっている。(イリイチ 1977:191)

前述のように、私たちの社会における問題解決の方法は、地域の防犯対策として監視カメラを設置することから地球規模の温暖化ガス排出規制に至るまで、制度や管理システムへの「期待」がその基盤にある。この「期待」を誘発するのは、真木の意味での「支配・依存の欲求」である。

「支配・依存の欲求」と同時に「出会いの欲求」にも突き動かされるのが私たち人間の本質であることを思い出して欲しい。「出会いの欲求」に基づく関係構築では異質な他者の存在こそが求められ、それ故に他者への「希望」が問題解決の基盤となる。イリイチが主張する、「制度への期待」から「他者への希望」へという問題解決の転回は、真木の概念を用いると、「支配の欲求」から「出会いの欲求」に基づく他者関係構築への方向転換ということになる。

「出会いの欲求」による問題解決のアプローチ、すなわち他者に希望を託し、人への信頼を基盤とする社会の構想は、その方向は見えても具体的な方策としてまとめ、体系的に提示するのは難しい。というのも、人への信頼に基づく問題解決の方策は、それを「体系化」しようとした途端に制度や管理システムという「支配・依存」の罠に再び陥ってしまう危険を常に孕んでいるからだ。

「他者への希望」を基盤にした社会の構想を、「制度への期待」へと回収される危険を回避しながら進めていく一つの方法は、「出会いの欲求」に突き動かされながら、他者へ「希望」を託すことで問題を乗り越えている人々の実践例を発掘し、個々の実践の試行錯誤のプロセスを見つめることに徹することであろう。ここでは分析や体系化よりもまず観察が重要なのだ。

このような実践例として、まずベシャワール会と中村哲医師の「国際」協

力活動¹⁰を紹介したい。

4. ペシャワール会と中村哲医師に見る「出会い」の力

2008年1月25日付けの朝日新聞(夕刊)の「ニッポン人脈記—わが町で本を出す①」で石風社の福元満治代表が取り上げられているが、そのインタビューの中で彼はペシャワール会現地代表の中村哲医師に言及し「9・11で日本人は中村を発見したんです」と述べている。

福元が言うように、中村哲のパキスタン・アフガニスタンにおける活動を日本の主流メディアが取り上げ出したのは、まさに米国東部の9・11テロ事件への報復として米英軍によるアフガニスタン空爆が始まった直後のことである¹¹。朝日新聞はテロ事件から1ヶ月経過した10月10日、アフガニスタン空爆についての特集を組んでいる。その中で米英軍が空爆による報復攻撃と同時に「人道支援」と称して食糧パックを投下していることが報道された。この食糧投下に対してはすぐにノーム・チョムスキーをはじめ多くの人が非難の声を上げた¹²。アフガニスタンで支援活動が続けてきたNGOも、この食糧投下が飢餓の改善には微々たる効果しかなく、それどころかNGOによる

10 中村は「国際協力」という言葉にはずいぶん批判的であることを、以下の発言を引きながら注記しておく。

「国際貢献とか国際協力活動という言葉は眉唾で見るべきだと思いますね。しかも日本で使う「国際」という意味と現地側が受け取る「国際」とこれまた違うんですね。「国際」というのは「国を超えた」という意味ですけども、日本では欧米列強と歩調を合わせたひとつのソサエティのことを言っている気がするんですよ……私たちは国際協力の見本のように言われることが時々ありますけれども、自分ではこれは地域協力だと思っています。私、田舎者ですから、九州とアフガニスタンしか知りませんから」(中村 2006a: 34)

11 アフガニスタンへの空爆は2001年10月7日に始まった。

12 “... accompanied by some food drops outside of Taliban-controlled areas (most of the country), such a transparent PR gesture that there is no attempt even to conceal it.” (“Reaction,” Oct 8, 2001, *Znet*)

今後の支援活動がこれにより大きく阻害されることになる」と訴えた¹³。人道援助と軍事介入の区別がなくなることで地元の人たちに援助団体に対する猜疑心が生まれ、彼らの NGO 活動が決定的な打撃をこうむるからだ。

アフガニスタン空爆が特集された同じ新聞の社会欄に「飢えた市民にナンを」と題された小さな記事がある。記事はアフガニスタンで診療や井戸掘りなどの支援活動をしているペシャワール会の中村哲医師が「記者クラブで講演し、カブール市内で飢餓の恐れがある人々にナンを焼いて配る活動を始めたことを明らかにした」と紹介している。爆弾とともに食糧パックを投下する米英軍の行動と、ナンを焼き手で配るペシャワール会の活動は鮮烈なコントラストをなしており、私自身がそうなのだが、この記事を読んでペシャワール会の活動に興味を引かれた読者も多いと思われる。

中村が「アフガンいのちの基金」の募金活動で帰国したこの時以来、主流メディアは中村の活動を取り上げ、また地方の講演会にも多くの聴衆が集まり、ペシャワール会と中村哲の名は多くの人の耳目に触れることとなった。

ペシャワール会の活動を簡単に紹介しよう。ペシャワール会は、パキスタン北西辺境州・アフガニスタン北東部での中村哲医師の医療活動を支援するために結成された非政府組織で、1984 年に活動を開始した。現在 PMS（ペシャワール会医療サービス）基地病院を拠点に年間約 10 万人近くもの（2006 年度は 87,467 名）の患者診療を行っている¹⁴。活動当初はハンセン病治療を中心とする医療活動を行っていたが、大旱魃による水不足に対処するために

13 国境なき医師団は次の記事で食糧投下の実態を伝えている。

“Moreover, the amount of food being parachuted into Afghanistan from American warplanes is tiny, relative to the scale of the looming famine. So far 75,000 ration-bags have been dropped. Each contained enough food for one person for one day. Given that there are at least 5m Afghans needing food aid, this is not much.” (“Bombs and bread,” Oct 12, 2001, *The Economist*)

14 ペシャワールにある PMS 基地病院は、諸般の事情によりジャララバードに全面移転が予定されているとのことである（ペシャワール会報 93・94 号より）。

2000 年 8 月から井戸掘りやカレーズ修復などの水源確保活動を開始する¹⁵。旱魃により水と食糧が不足し、それに追い討ちをかけるようにタリバーンへの国連制裁として食糧支援がストップ(2001 年 1 月)、アフガン人の食糧状況は危機的な状態となる。ペシャワール会はとにかく飢餓を防ごうと、2001 年 6 月に食糧配給計画「アフガンのいのちの基金」を開始し、小麦と食料油購入の募金活動と現地での食糧配給を開始した。米英軍によるアフガニスタン空爆がこの食糧配給活動の最中に始まったが、激しい爆撃にもかかわらずペシャワール会の地元アフガン職員は食糧を配りつづけた。中村が日本の主流メディアに取り上げられ始めたのはまさにこの時であった。「いのちの基金」には最終的になんと 7 億を超える募金が集まり、食糧配給事業の後に残った資金で農業計画と水利事業からなる「緑の大地」計画を開始する。水利事業では 2003 年 3 月から灌漑用水路の建設に乗り出し、4 年にわたる奮闘の末、2007 年 4 月に全長 13.1 キロメートルの「マルワリード用水路」が完成した¹⁶。

ペシャワール会と中村の活動は医療から灌漑用水路建設まで広範囲にわたるが、彼らの活動に一貫して観察できるものがいくつかある。中村の著作やインタビューを引用しながらそれらを確認していきたい。

一つ目は、彼らが常に地元民の側に居るという点である。

私たちに確乎とした援助哲学があるわけではないが、唯一の譲れぬ一線は、「現地の人々の立場に立ち、現地の文化や価値観を尊重し、現地のために働くこと」である。(中村 2007 : 179)

国連の機関であれ NGO であれ、支援団体の中にはアフガンの人のためにではなく、自分たちのために活動を行っているようにしか見えない組織があると中村は言う。

15 この時の旱魃により予想される被害はアフガニスタンだけで「飢餓に直面する者 400 万人、餓死線上にある者 100 万人」と伝えられている (2000 年 6 月、WHO)。

16 灌漑用水路事業における中村の奮闘ぶりは中村 (2007) に詳述されている。

欧米の NGO のなかには、自国の国内向け宣伝としか思えない「援助活動」もあった。井戸を千本掘ったと宣伝しながら、じつは既存の井戸にポンプを装着するだけのプロジェクトだったり、極端な例になると、ポンプだけつけて井戸を掘らず、写真だけ撮って帰って行った例もある。
(中村・ペシャワール会 2004：10)

自分たちの文化を押しつけてさっさいなくなるのではなく、「郷に入っては郷に従え」と現地の流儀で支援を行うのが彼らの活動の基本である。

二つ目は、地元民の身の丈に合わせた支援を行っているという点である。井戸を掘るのは大型掘削機ではなく、「手掘り」という伝統的なやり方で行う。用水路建設にしても、試行錯誤を繰り返して蛇籠と柳枝工による護岸へとたどりついた。「現地の人々が維持できるもの、現地の伝統的なスタイルに似せたものを」(中村 2006c：47) というのが彼らの土木事業や治水事業の基本方針である。

三つ目は、地元民と互恵的な関係を築き上げているという点である。中村は、著作やインタビューの中で、自分たちはアフガン人の援助に行っているのだが、逆に彼らが身体を張って自分たちを守ってくれることもあるのだと述べている。

私たち PMS (ペシャワール会医療サービス) の安全保障は、地域住民との固い信頼の絆である。こちらが本当の友人だと認識されれば、地元住民が守ってくれるのである。もし、武装した護衛をつけ、人々の苦楽と別世界に暮らしていたら、同じ憂き目にあうことだろう。(中村 2006b：134)

最後は、中村やペシャワール会の活動はいくつもの「出会い」に動機づけられてきた点である。中村は、今自分がアフガニスタンで活動しているのは度重なる「出会い」がもたらした結果なのだと、来し方を回顧しつつ次のように書いている。

「事実は小説よりも奇なり」という。アフガニスタンやパキスタンに縁もゆかりもなかった自分が、現地に吸い寄せられるように近づいていったのは、決して単なる偶然ではなかった。しかし、よく誤解されるように、強固な信念や高邁な思想があった訳ではない。人はしばしば己を語るが、赴任までの経緯を思うとき、生れ落ちてからの全ての出会い——人であれ事件であれ、時代であれ——が、自分の意識や意思を超えて関わっていることを思わずにはおれない。(中村 2006b : 56)

中村は「現地の人々の立場に立ち、現地の文化や価値観を尊重し、現地のために働いたが、決してアフガンの仲間へと同化していったわけではない。むしろ、異国の他者として彼らの中に分け入り、彼らの「身の丈に合わせた」支援で信頼を得ながら、異質な他者としての付き合いを保ち続けてきた。アフガン人の側でも彼を仲間に入れろというのではなく、距離を置きながら「互恵の精神」で共生する姿勢をとっているように見える。アフガンの地はガンダーラの昔から常に民族や文化の出会いと衝突の場所であった。この多民族・多文化の地で生きてきた人々は、対立しながらも共に生きる術を長い歴史を通じ身につけてきたはずだ。

アフガニスタンでは政情(軍事介入)も自然環境(旱魃)も刻一刻と変わっていく。昨日の敵は今日の友という状況もめずらしくない。その変化する情勢の中で、中村はアフガンの人たちと他者としての出会いを繰り返す。中村に潜在していた「出会い」の力が、多民族の共生の地であるアフガニスタンで発揮されたのは「決して単なる偶然ではない」のだ。

5. 竹富島のまちづくりと「うつぐみ」の精神

強大な軍備を所持しグローバルな市場経済システムの中心にいるものは、他者をコントロールする大きなパワーを持っている。このような国や組織は、何か問題に直面すると制度をいじり管理システムを充実させることで解決の道を探りがちである。つまり、彼らの他者関係への欲求は、そのパワー故に「支配の欲求」の側に大きく傾いている。

「出会いの欲求」に駆り立てられ、人への信頼を抛り所に問題解決の道を模索する人は、現代の軍事と経済の巨大システムの周縁に住まう人たちであろう。前節で紹介したアフガン人と彼らを支援する中村が生きているのは、まさに「国際社会の辺境」である。

この節ではもう一つの事例として、外部資本による開発の荒波を受け、土地買占めへの反対運動を契機に独自のまちづくりと観光を実践してきた竹富島を紹介したい。

竹富島は石垣島の西方約 6 km 程の海に浮かぶ周囲 10 km に満たない珊瑚礁の小島である。2006 年 10 月の調査によると人口は 361 人（男 165 人・女 196 人）で世帯数は 165 戸。全国的に地方の過疎が問題になる中、竹富島の人口は 15 年連続増加中ということである。石垣島から高速船で約 10 分程というアクセスの便利さもあり、観光客数は年間なんと 42 万人にものぼることだ¹⁷。

観光客が多い理由の一つは、この島の恵まれた観光資源にある。まず集落全体が重要伝統的建造物群保存地区となっている。このため、赤瓦と漆喰の屋根や石垣と白砂の道が保存され、集落は昔ながらの景観を保っている。また、夕日の名所である西棧橋や集落を見渡せるなごみの塔が登録有形文化財となっており、喜宝院・蒐集館の収蔵展示品も 2007 年 1 月に沖縄県で初の登録有形民俗文化財として指定された¹⁸。

このような観光資源に魅せられて多くの観光客が島を訪れるのだが、蒐集館の上勢頭館長は、「そんな島をベルトコンベアーに乗せられて、短時間で通過していく観光をやっていたら、島は疲弊して」いくと今の観光のあり方に警鐘を鳴らしている¹⁹。従来型の観光から脱皮するために、竹富島では観光とまちづくりの興味深い取り組みが行われている。以下ではその一つ、修学旅

17 上勢頭（2007）提供のデータに基づく。

18 竹富町は西表島の世界自然遺産登録と竹富島・波照間島の世界文化遺産登録からなる複合遺産を目指している（ウェブ版八重山毎日新聞、2007.1.10）

19 上勢頭（2007：4）を参照。

行受け入れの試みを紹介したい²⁰。

竹富島で修学旅行を受け入れる場合、大きなホテルなどないため、生徒や先生は、当然いくつかの民宿に分散して宿泊せざるを得ない。これは今の若い人にとって貴重な体験となるはずだ。大きなホテルに生徒全員が泊まる場合、そこでの過ごし方は、学校がそのままホテルに移動しただけのいつもと変わらぬ集団生活である。竹富島の民宿にはそれぞれ個性がある。民宿に分宿した生徒たちは、民宿のおじいやおばあとそれぞれ彼らだけの場所と時間を共有する。この体験は後々必ず彼らの血となり肉となっていくはずだ。

上勢頭館長によると、修学旅行の一つ仕掛けとして、夕食はあえて浜辺に全員が集まってバーベキューパーティーをするそうである。バーベキューの用意はどうか。生徒たちは複数の民宿に分散しているので、バーベキューの仕込みはこれに参加している民宿が協力して行なわなくてはいけない。普段は商売敵の民宿の皆さんは、この時ばかりは一致団結して準備を行う。バーベキューの後にはみんなで演芸会。生徒たちに沖縄関係の芸の企画を考えてもらう。たとえばデンスー節で生徒全員が踊りまくる。となるとバックバンドが必要。ここでも民宿の人たちが三線や笛で即席バンドを作って協力する。上勢頭館長によると、これが竹富島の伝統である「うつぐみ」（組むこと、協力すること）の精神であり、このような仕掛けを設けることで、「うつぐみ」の精神が次の世代へと受け継がれていくということだ。

竹富島は1970年代初め、外部資本により島の総面積の二割以上の土地が買い占められたという。この開発に気づいた住民が危機感を抱き、1972年5月に「竹富島を生かす会」を結成して開発防止の住民運動を展開していった。沖縄本土復帰の時のことである。島の自治を目指す努力は、町並み保存の運動へとつながり、1982年には全国町並み保存連盟に加盟、1986年には「竹富町歴史的景観形成地区保存条例」が制定され、竹富島のリーフまで含む全域が保存地区となった。このまちづくりの運動は「竹富島憲章」（1986年3月に公民館定期総会で承認）として実を結ぶ。

20 以下は、2007年3月に上勢頭館長を訪れた際に伺った話のメモにもとづく。上勢頭館長にはこの場を借りて感謝申し上げたい。

竹富島憲章の前文には「かしくさや うつぐみどう まさる」²¹と、うつぐみの精神が掲げられ、さらに「保全優先の基本理念」として「売らない」、「汚さない」、「乱さない」、「壊さない」、「生かす」の五原則が立てられている。

「売らない」：島の土地や家などを島外の者に売ったり、無秩序に貸したりしない

「汚さない」：海や浜辺、集落など島全体を汚さない。また汚させない。

「乱さない」：集落内、道路、海岸等の美観を、広告、看板、その他のもので乱さない。また、島の風紀を乱させない。

「壊さない」：由緒ある家や集落景観、美しい自然を壊さない。また、壊させない。

「生かす」：伝統的祭事行事を、島民の精神的支柱として、民俗芸能、地場産業を生かし、島の振興を図る。

竹富島の島民の三分の一は島外からの移住者とのこと。竹富人は、島の伝統をただ維持・保全するのではなく、外から常に新しい風を呼び込みながら伝統の掘り起こしや再構築を行うことで、今に活かす努力を続けているように感じる。地元意識の高まりは、ともすれば住民の目を内向きにさせ、よそ者を排除する方向へと向かいがちである。竹富島ではそうはならなかった。「うつぐみ」の精神は、「外に開かれた仲間意識」のようなものを長い年月をかけてこの島に育んでいったようである^{22,23}。

21 このことばは五百年前の島の偉人・西塘様の遺訓といわれており、「みんなで協力することこそ優れて賢いことだ」という意味だそう。次の竹富島ゆがふ館ウェブサイトの解説を参照のこと。<http://www.taketomijima.jp/museum/kurasi/shikumi.html>

22 「伝統を大事にするといいながら、決してとことん閉鎖的でないのが島民性でしょう」（上勢頭 1998：11）

23 2007年12月28日付けの八重山毎日新聞で、竹富島でリゾート開発計画が進められていることが報道された。島民はこれにどう対処するか、今後の動きに注目である。

6. むすびにかえて

大分県の湯布院は観光やまちづくりの手本として全国に名を馳せているが、この地域はまた、陸上自衛隊の日出生台演習所があることでも知られている。日出生台演習所では1999年から米海兵隊による実弾砲撃訓練が行われている。この訓練が行われることになった経緯は次のとおり。1995年の沖縄駐留米海兵隊員による少女暴行事件をきっかけに、沖縄の基地反対運動が全国規模で激しさを増す。日米両政府は運動を沈静化すべく、1996年4月に普天間基地の5年後から7年後までの県内移設を表明、同年7月にキャンプハンセンで行っていた「県道104号線越え実弾砲撃訓練」を全国五箇所の演習場へ分散移転することを明らかにしたのだ。

田中(2005)によると、日出生台演習所が砲撃訓練所の候補に上がった1995年11月、「湯布院町の由布院観光協会・旅館組合が町に反対を申し入れ、このころから隣接の他の二町と一緒に「官民一体」の反対運動」(田中2005: 184)が起こったそうだ。彼らは反対運動を続けるうちに、自分の土地への移転反対に固執しては問題の解決はないと確信し、沖縄と連帯して米海兵隊の撤退を求める運動にのりだす。

彼らは沖縄の反戦地主たちと協力しながら、1997年5月30日付けのNew York Timesに“Please Remove Your Marines from Our Soil”という見出しで「憂慮する日本人からアメリカの友人へのメッセージ」と題した意見広告を載せ、その後さらに韓国の米軍基地周辺の市民との交流も開始し、2001年にはドキュメンタリー映画を制作するまでに活動を広げているそうである²⁴。

湯布院の平和運動は、自分たちの地域の問題をその地域に閉じた形で解決をするのではなく、同じ苦境におかれている他者と手を結ぶ方向へと自分を

24 「梅香里(メヒャンニ)」というドキュメンタリー映画である。この映画のウェブサイト(<http://www.motherbird.net/~mehyang/>)では「梅香里、沖縄、湯布院、日出生台の人々の交流と信頼関係から生まれた日本と韓国の“地域合作映画”」と紹介されている。

開くことで推進されている。安全保障という巨大な軍事体制の周縁に住まう人が、地域に閉じるのでなく同じ苦しみを抱える他者と出会うことで新たな問題意識の高みへと到達しているのだ。

湯布院で旅館（亀の井別荘）を営む中谷健太郎氏は、こういった外に開かれた仲間意識を「「仲間」から「みんな」へ」という卓抜なフレーズで表現している。

「味方」から「敵」へ、と転ずる「越境の跳躍」を「仲間」から「みんな」へと向かう「境界のすり足」に替えたい。いきなり、さすれば「障り」を生じる。無視すれば相手は「無縁の人」になる。「さわらない」で「注意深く『すり足』に近づいていく」やり方は、世阿弥の昔から伝統的な「方法」である。ムラの衆だって体液の中に、かつて異人にひたひたと歩み寄った自分の足音を聴き取るはずだ。山を越えてやってくる者たち、「塩売り」「刃物売り」「修繕屋」「クスリ売り」「坊様」「旅行者」「反物屋」に、何と温かく確実に近づいて行ったことか。「仲間」でも「味方」でも、ましてや「敵」でもない「みんな」という概念を、ふんわりと浮かび挙げがらせながら。

地域を一枚の「仲間社会」と見るのは幻想だ。地域は内に、地域別、業種別、世代別、その他のもろもろの多様な「仲間」を抱えながら、外の仲間たちとも結んで、交合、生産を繰り返す共生社会だ。そこには近隣に市町村合併を強制する「方法」もなければ、味方のために敵を破壊する「認識」もない。内につながり、外に広がる個人の連環である。（中谷 2006：195）

ここまで中村医師とペシャワール会のアフガン支援活動、竹富島と湯布院のまちづくりを見てきた。彼らは巨大権力や大資本という外からの圧力を受けたとき、それに真っ向からぶつかってポキリと折れるようなことは決してしない。彼らには、圧力をしなやかに受け止めて吸収し、それを他者と結ぶ合う力へと変換して抑圧する側へと投げ返す、そういうしたたかさがある。基地や原発など日本社会のお荷物を押しつけられている地域の人たち、ある

いは社会から排除され体制の周縁に住まう人たちが、どうやったら「みんな」として「出会い」、自分たちの手で社会を動かし生き延びることができるか。そのヒントを彼らの日々の活動から学ぶことができるのではないか。

〈参考文献〉

- イリイチ、イヴァン（1977）『脱学校の社会』東京創元社
- イリイチ、イヴァン（1979）『脱病院化社会——医療の限界』晶文社
- イリイチ、イヴァン（1991）『生きる思想——反＝教育／技術／生命』藤原書店
- 上勢頭芳徳（1998）「21世紀・竹富島物語——島の将来を考えるための7つのキーワード」『やいま』No.70
- 上勢頭芳徳（2007）「竹富島の行き方・竹富人の生き方」『やいま』No.167
- 神崎宣武（編著）（2005）『文明としてのツーリズム——歩く・見る・聞く、そして考える』人文書館
- 田中伸尚（2005）『憲法九条の戦後史』岩波新書
- 中村哲・ペシャワール会（2004）『空爆と「復興」——アフガン最前線報告』石風社
- 中村哲（2004）「囚われのアフガン——「国際正義」の下で」『DAYS JAPAN』2004年6月号、26-30。
- 中村哲（2006a）「インタビュー中村哲——アフガンから見た平和憲法のリアリティ」『Sight』30号（2007年1月増刊号）、ロッキング・オン、24-35。
- 中村哲（2006b）『アフガン命の水を求めて（NHK 知るを楽しむ——この人この世界）』日本放送出版協会
- 中村哲（2006c）『アフガニスタンで考える——国際貢献と憲法九条』岩波ブックレット No.673
- 中村哲（2007）『医者、用水路を拓く——アフガンの大地から世界の虚構に挑む』石風社
- 中谷健太郎（2006）『由布院に吹く風』岩波書店
- フロム、エーリッヒ（1951）『自由からの逃走』（日高六郎訳）東京創元社
- 本橋哲也（2005）『ポストコロニアリズム』岩波新書
- 真木悠介（2003）『気流の鳴る音——交響するコミュニケーション』ちくま学芸文庫
- 見田宗介（1999）『現代社会の理論——情報化・消費化社会の現在と未来』岩波新

書

見田宗介（2006）『社会学入門——人間と社会の未来』岩波新書